



同志社人物誌 (42)

村 井 知 至

辻 野 功

村井知至は、同志社が生んだ偉大なキリスト者で、社会主義者で、英語学者であった。にもかかわらず、同志社の歴史で村井が評価されることは少ない。まして日本全体の歴史の上で評価されることは、なおさら少ない。もちろん、村井は、日本社会主義史上、明治三十一年結成の社会主義研究会の会長として、また、日本で最初の体系的な社会主義の

著述である『社会主義』の著者として言及はされているけれども、しかしそれはじゅうぶんなものではない。『明治社会思想の形成』（芳賀書店）や『明治の労働運動』（紀伊国屋新書）において村井に触れた私自身も、その例外ではなかった。こうなった最大の原因は、村井がキリスト教界、社会主義運動、英語教育界の三分野で

多面的な活躍をした人であるのに反し、我々研究者の方が、村井の全活動分野をカバーする能力を持っていないことである。六、七年前のことであつたが、あるとき、上野直藏先生に、「今私は、日本の社会主義の草分けの一人である村井知至に関心を持っています」とお話ししたところ、「君の言っている村井知至というのは英語学者の村井先生のことか、あの人は社会主義者だったのかね」と言われたことがある。上野先生は社会主義者村井知至を知らず、私は英語学者村井知至を知らなかったのである。

また、松田道雄先生の『私の読んだ本』（岩波新書）には、ご自身が受講された予備校の冬期臨時講習会を回想された次のような箇所がある。

「客寄せのために、受験書で有名な先生がたが東京から呼びよせられていた。

いちばん印象に残っているのは、村井知至という、おしやれで小柄の六十歳ぐらいの先生だった。ひょうきんな人で、口をきくたびに生徒を笑わせた。和文英訳を受ければもっていられたが、日本文と英文は逆の構造だから、和文英訳は下から上へと、う

ながが川をのぼるように訳していけばよいと、うながが川をのぼる様子を全身をつかって表現された。先生の配られたプリントの例題は、奇妙にどれもこれも最後から英語になおしていくとうまくできた。このか



後列右から二人目が村井知至。
その右、山岡邦三郎、左は原忠美。
(明治二十八年二月、山岡保氏蔵)

わった老先生が、日本の社会主義運動の草分けだということを知ったのは、それから二十年以上たってからだだった。」

村井知至について研究しなければならぬと思いつつ、キリスト教についても、英語教育史についても、知識がないのでそのままにしていた。ところが東洋経済新報社から出ている『日本近代史辞典』が、京都大学人文科学研究所の渡部徹教授を中心にして『日本近現代史辞典』として改訂されることになり、京大人文研の研究会で私に「村井知至」の項目が割り当てられた。先述したように、私はキリスト教に関する知識がないのであるが、「盲目の国では片目は王様」のたとえのとおりで、引き受けるをえなくなった。

早速既刊の事典類で「村井知至」の項を引いて調べてみたが、直観的に納得できないものばかり。そこで思いついたのが早稲田大学名誉教授安部民雄先生のことであった。安部民雄先生の父は、かの安部磯雄であり、安部磯雄と村井知至は、同志社でのクラスメイトであり、親友中の親友であったからである。安部民雄先生とは安部磯雄研究の論文抜き刷りをお送りしたことから文通があったので、

安部先生に「村井知至先生のご子息はどこにいらっしゃるのでしょうか」とお尋ねしたところ、「ご子息は村井勇吾氏といわれ、関学でドイツ文学を教えていらっしゃるはずだ」とのお教えをいただいた。すぐに関学の事務局に電話をしたところ、「すでに関学をお退きになり、現在は新設の兵庫医科大学で教鞭をとっていらっしゃる」とのこと。

早速村井勇吾先生に連絡をとり、尼崎のお宅におじゃましていろいろご教示を賜り、また少なからぬ資料を拝借させていただき、ともかくも辞典の原稿を書き上げた。以下はその原稿である。

「村井知至 むらいともよし (一八六一—一九四四、文久一・九一—昭和一九・二一・一六) キリスト教徒、社会主義者、英語学者。松山藩士の子として出生。横浜海岸教会で受洗。一八八四年(明治一七)同志社英学校を卒業し神学科に進んだが、伝統主義的なカリキュラムにあきたらず、学校当局と対立し、親友安部磯雄と共に中退。一八八九年渡米し、アンドーヴァ神学校卒業。一八九三年帰国し本郷教会を牧した。日清戦争後再渡米、アイオワ大学で社

